

遺跡の保存

小林 隆 幸

人類が地上に登場して以来、豊かさを求める人間の欲求は絶えることなく現在に至っている。食料を求め森を切り開き、居住空間を作り出す、こうした行為は規模や形態は多少変わっても現在という開発である。すなわち人類の歴史とは、過去から現在へ変わらずに一貫した開発の歴史である。

本来人類に豊かさを与えるはずだった開発が、現代に至って逆に危惧を抱かせるようになった。最近盛んに叫ばれるようになった自然保護や植物保護等はその反映である。これらについては他に詳しいので譲るが、その他に我々の先人が残した文化財破壊もその例である。自然環境が我々の生活にとって必要不可欠な居住環境であると同時に、文化財も心に豊かさを与える歴史的環境を作り出す点で我々の生活にとってなくてはならないものである。しかし、寺院、仏閣、城等に代表されるような建築物についてはその比ではないが、発掘によって現れてくる埋蔵文化財、すなわち地中にその痕跡を残す文化財＝遺跡については、道路、鉄道、最近ではゴルフ場等々開発の名において毎年莫大な数が姿を消している。最近では藤ノ木古墳や吉野ヶ里遺跡等が話題となり、一種の古代史ブームを呼んでいるが、全国で行なう発掘の90%以上の遺跡が破壊を前提としている。現に吉野ヶ里遺跡でさえ、工業団地造成計画に伴い始められた発掘調査であり、弥生時代の環濠集落がたまたま見つかり耶馬台国との関連が指摘されたからこそマスコミが騒ぎ現在のように整備され、年間200万人を超える人々が訪れているものの、本来は調査後ただちに壊される運命にあった。吉野ヶ里遺跡の幸運な例はごく稀な例である。特に本県のような土木王国では、開発から貴重な遺跡を守ろうとする発想さえ生れにくかったようだ。開越自動車道や上越新幹線および

北陸自動車道の開通は、首都圏や他県への時間を短縮し豊かな交通事情を我々にもたらしたが、その豊かさの下には十分な手を加えられずに壊されたもの、また記録保存（記録破壊が正しいとする見方もある）の名目で破壊されたものなど、多くの遺跡が眠っている。

しかしながら、近年ようやく県内でも遺跡の価値を見出し、必要以上の開発から遺跡を守ろうとする地域住民の動きが見られるようになった。それは県民の文化に対する価値評価の高まりであると言える。その遺跡保存運動の概要を以下に述べる。

①籠峯遺跡（中頸郡中郷村）

この遺跡には近隣に自衛隊岡山演習場があり、ここには樹木がなく付近の農業用水の確保が困難であることから、防衛施設庁の予算でため池建設が計画された。その溜池の規模は巨大で、貯水量271,000t、20数億円の費用を要する。それに伴い、1984年の春から村教育委員会の主体で緊急発掘調査が行われた。その結果、縄文時代後・晩期（今から3000年ほど前）の墓地、祭祀遺構、居跡を含む大遺跡であることが判明した。

遺跡の重要性に鑑み、県内の考古学研究者の連名による保存要望書と日本考古学協会による保存要望書が関係当局に出され、その直後地元住民や研究者、愛好家、学生を含む「籠峯遺跡を守る会」が結成された。ここに新潟県初の遺跡保存運動がスタートしたのである。

こうした動きを背景に、防衛施設庁、文化庁、県、村の4者で遺跡の一部保存を合意し、1985年の春から86年8月にかけて再調査が実施された。その結果、各種の配石遺構（150以上）、土壇墓（約20）の他、集石、石垣状石列、埋壘等の祭祀遺構が検出され、また遺物の量も莫大であり、工器片が平

箱で約2,500箱、石鏃をはじめとする石器類や祭祀関係の石製品も多数出土した。

この他に、現在建設中の巨大な溜池が本当に必要かどうかはまだ結論が出ていないが、一部を残し遺跡はダムの底となる。

この保存運動は成功を納めたとは言えないが、その後の県内の遺跡保存運動の布石になり、その意義は大きい。

②蒲ヶ沢（ガワソ）遺跡群（新津市）

この遺跡の保存運動は、遺跡群が立地する丘陵が東北横断自動車道の土取り場になったことに端を発する。この計画に伴い1987年秋に発掘調査が行われ、その結果、県内最大の古墳（内墳）や大規模の製鉄址群をはじめ、縄文時代の遺跡や弥生時代の集落跡が発見された。こうして土取り予定地の全体が遺跡であることが判明したのである。

遺跡の重要性が明らかにされたことにより、地元では遺跡に興味を抱く人が増え、1988年1月には「新津の古代と今を考える集い」（新古今集）が発足し、保存運動を展開した。また89年4月には、約8,500名の保存要望の署名が新津市長に提出された。

その後も発掘調査が継続して行われ、弥生時代の集落が、吉野ヶ里遺跡と同じ性格を持った環濠集落（集落の外側に溝を巡らす）であったことをはじめ、製鉄址に関する重要な調査データも得ることができた。

遺跡の重要性やそれに対して盛り上がりを見せた地元住民の保存運動により、古墳および弥生時代の環濠集落については新津市も保存をすることで合意した。ただし残念ながら製鉄址の保存までは至らなかった。

現在、土取り用の道路が取り付けられ、土砂を積んだ大型ダンプが絶えず往来している。

③耳取山遺跡群（見附市）

この耳取山一帯は、石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代からなる複合遺跡であり、なかには市の史跡に指定されているものもあった。1986年春に民間業者がこの丘陵一帯にゴルフ場を主体とする総合スポーツ・レクリエーションの基地開発を計画したため、あらためて同年8月から11月にかけて遺跡の分布および発掘調査が行われた。

その結果、新遺跡の発見が相次ぎ、それとともに類例の少ない遺構や遺物が検出された。そして太古から幾千年もの間、この丘陵に人々が住み続けたことをあらためて認識させた。

遺跡の保存運動は、地元の歴史研究4団体により展開され、それに一部の地権者の反対も加わって、87年の11月には業者側で開発計画の中止を宣言した。しかしその後も耳取山開発計画は、手を変え形を変え浮上してくる兆しを見せており、余談を許さない状況にある。

この遺跡の保存運動は、その後単なる遺跡の保存運動ではなく、郷土の自然環境と歴史的環境づくりへと目的を発展させ、88年4月には自然愛好者を含め「見附の自然と遺跡を守る会」を発会させる。このような保存運動を契

機に町づくりを展開しようとする試みは運動の理想でもあり、画期的なことである。なおこの会は現在も根強い運動を続けている。

遺跡は先人が残した文化遺産として貴重であることは誰しもが疑いなく思うであろう。しかしその反面、開発にとってみれば何かと規制を持たらず障害物であると思われ兼ねない。

開発も遺跡保存も人々の暮らしを豊かにするためのものという点で本来の目的は一致している。したがって、我々の生活にとっていずれも重要であり、どちらかを犠牲にしてもよいというものでもない。ただしここで注意してほしいのは、遺跡をはじめとする文化財は一度壊したら再生できないもの、代替性のないものであるということである。開発の場合も、人々の生活に必要な不可欠で、その価値は遺跡のそれを上回るものもあるだろうが、往々して場所の移動が可能なもの、代替性のあるものも見受けられ、なかには本当に人々の暮らしのにとって必要なものか疑問を抱かせるものもある。①籠峯遺跡の場合は、計画されているような巨大な溜池が本当に必要なものか、また代替性の可能性はないのか、といった疑問もあるし、②蒲ヶ沢遺跡群の場合もま

た土取りの代替地の可能性を秘めている。さらに③耳取山遺跡群の場合は、果たしてその地にゴルフ場が必要なのか、という素朴な疑問を抱かせる。真の開発とはこうした疑問や問題点を払拭してはじめて成立するのではないだろうか。

ここで開発側に求めることは、なんでもかんでもやみくもに開発するのではなく、それが及ぼす社会的な影響を考慮しつつ慎重な態度で臨んでほしいということである。

遺跡を含む文化財は再生不可能という重要性の他、その自然と一体となってそこに住む人々の生き方（文化性）を特色づける役割も果たしている。すなわちその地域性・文化性を作り出す要因になっているのである。したがって開発側は遺跡の持つ重要性を理解するとともに、保存側はそれに応える形で協力し、お互いが補強し合いながら人々が求める真の開発を推進していくことが肝要であろう。

遺跡と開発、この両者が調和しながら共存していくことこそ、地域づくり、快適な環境づくりにとって不可欠な要素なのではないだろうか。

（文化財保存全国協議会全国委員）

読書案内

『生態学 一概念と理論の歴史一』

ロバート・P・マッキントッシュ 著
大串隆之・井上 弘・曾田貞滋 訳
思索社 ¥5,800 (旧価)

僕が学生時代に勉強したのは、主に湖沼の植物相。大学院では福島潟の植物について調べた。それで、何かの発表会で僕がしゃべることになったら、新潟県内の湖沼の植物についてである。いつだったかの小さな発表会の時、やはり、福島潟の植物について話をした。質疑応答の時、湖沼の植物を守る、あるいは、復活させるのにはどうしたらよいのか、という質問が出た。こういう質問が出るであろうことは予想していたが、実は、こうしたことには触れられなかった。僕のやったことは、事実の記録と、そこからほんの情ないほどの傾向を導き出しただけなのだ。とても、そんな実際の要求に答えられるものではない。そんなことを期待する方が間違っている、とひそかに思う。それなら、お前のやったことは意味がないではないか。そうかもしれない。

生態学、実によく分からない分野だ。僕がやったこともその一部に入るかもしれない。試験管の中でゾウリムシがどのように殖えるのか、というようなことから、地球全体の環境についてまで。今やまた、生態学は脚光を浴びている。僕が勤める学校の生徒の中にも、将来、生態学を勉強したい、という者がいる。そうでなくとも、多くの生徒は環境問題に絡

めて、生態学に関心がある。しかし、生態学とは一体何を研究する学問なのであろうか。どうも捉えきれない。何でもかんでも、その中に放り込んでしまえそうなのだ。

表題に掲げた本は、生態学の歴史をまとめたものだ。しかし、僕は消化不良を起した。なにしろ、しっかりとした生態学の知識がない。それでも二つ、やはり、と思ったことがある。一つは、生態学はその歴史を通じて、農業や工業などへの実際的な応用と不可分の関係にあること。もう一つは、まだ何一つとして解決された生態学上の問題はないこと。実際に問題を解決しなくてはいけないにもかかわらず、解決できない。

生態学は何やらヌエのようだという印象を拭い去れなかったどころか、確信さえした。あまりにも大きくて、複雑で、いろいろなものが入り込んでいるため、正体が把握できない。こんな化物にはたして何ができるのだろうか、と疑うと同時に、こんな化物だからこそ何とかしてくれる、という期待もある。この化物は自然全体を一度に把握したいという、人間の夢の権化かもしれない。カバーにある、『不思議の国のアリス』に出てくる猫の絵が、象徴的だ。

（笹川 通博）